2014 年 度 入 学 試 験 問 題

世 界 史 B

（試験時間　13：25～14：25　60 分）

1．この問題は，入学願書提出時に選択した科目の問題です。科目名を確認のうえ，解答してください。

2．解答用紙は，記述解答用紙のみです。

3．解答は，必ず解答欄に記入してください。なお，解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。

4．解答は，ＨＢの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。

5．解答用紙には，受験番号と氏名を必ず記入してください。

Ⅰ　以下の各文を読んで，空欄Ａ～Ｔに入る最も適切な語を答えなさい。(40点)

1．2004年に台湾で行なわれた総統選挙で（　Ａ　）が再選された。

2．1994年に南アフリカで行なわれた大統領選挙で（　Ｂ　）が当選した。

3．1984年に（　Ｃ　）がイギリスから独立し6番目のＡＳＥＡＮ加盟国となった。

4．1974年に（　Ｄ　）が最初の核実験を行ない6番目の核保有国となった。

5．1964年に4番目の核保有国（　Ｅ　）が中華人民共和国を承認した。

6．1954年に中国の周恩来首相とインドのネルー首相が（　Ｆ　）を発表した。

7．1944年にアイゼンハウアー指揮下の連合軍が北フランスの（　Ｇ　）に上陸した。

8．1934年に満州国執政であった（　Ｈ　）が満州国皇帝となった。

9．1924年に孫文は（　Ｉ　）党を改組し中国共産党員の加入を認めた。

10．1914年に孫文が亡命先の東京で（　Ｊ　）党を結成した。

11．1904年に第1次（　Ｋ　）で韓国政府は日本人顧問を置くことを認めさせられた。

12．1894年に全琫準らが（　Ｌ　）を起こし清と日本が出兵する契機となった。

13．1884年に日本と結んだ金玉均らが王宮を占拠し清軍に鎮圧される（　Ｍ　）が起きた。

14．1874年に日本は琉球（宮古）島民が殺害された事件を理由に（　Ｎ　）へ出兵した。

15．1864年に日本では四国連合艦隊による砲撃を機に（　Ｏ　）藩が攘夷の方針を転換した。

16．1854年にオランダ系移民の（　Ｐ　）人がオレンジ自由国を建てた。

17．1844年に清朝はアメリカと（　Ｑ　）条約，フランスと黄埔条約を結んだ。

18．1834年にプロイセンを中心とするドイツ諸邦による（　Ｒ　）が発足した。

19．1824年に始まる3度の（　Ｓ　）戦争によりコンバウン（アラウンパヤー）朝はイギリスに滅ぼされた。

20．1814年にオーストリア外相の（　Ｔ　）を議長としてウィーン会議が始まった。

II　マレー半島南部が植民地化された過程を，下記の語句を用いて150字以内で説明しなさい。(10点)

ペナン　港市　1826年　マレー連合州　インド　移民　錫（すず）　ゴム

III　以下の文章中の空欄A～Jに最も適切な語句を入れたうえで，続く設問に答えなさい。(50点)

グローバル化とは，地球上の諸々の活動が時間的・空間的な制約を超えて行われ，大量のヒト・モノ・カネが地球規模で往来するようになる現象を指す。グローバル化という言葉自体は1990年代に定着したといわれているが，この言葉が表わしている内容は，それまでの歴史の進展の産物であったと考えられる。以下，本格的なグローバル化に至るまでの歴史的な流れを簡単に整理してみよう。

遺伝学によれば，人類はアフリカ大陸にいた共通の祖先から分岐したものであり，長い時間をかけて世界中に広がっていった。①エジプトとメソポタミアで文明がおこると，両文明の間で交流がはじまり，次第にヒト・モノ・カネが行き来するようになる。また，キュロス2世が建てた（　A　）やその後に形成されたギリシアからインドに至るアレクサンドロスの帝国のような大帝国が出現すると，以前に比べてヒト・モノ・カネの往来はさらに活発になった。

さらにユーラシア大陸では，草原の道・オアシスの道・海の道が古くから発達し，東西文化の交流に大きな役割を果たした。また②13世紀のモンゴル民族は，ユーラシア大陸の大部分を巻き込む形で征服活動を展開し，結果的に交易ネットワークの拡大をさらに推し進めたといえるだろう。

その後，15世紀末から16世紀になると，いわゆる大航海時代が幕を開ける。1492年に，コロンブスは（　B　）の地球球体説を信じて大西洋を西進する航海に出発した。また，ポルトガルのリスボンを出港したヴァスコ=ダ=ガマはアフリカ大陸南端の喜望峰を回って1498年にインドの（　C　）に到着し，インド航路を開拓した。さらにスペインを出発したマゼラン一行は，南アメリカ大陸南端の海峡を回って太平洋に入り，フィリピンをへてアフリカ経由でスペインに帰りつき，1522年に世界周航を成し遂げる。これらによって，西洋の人々は地球的な広がりを少しずつ意識するようになっていく。経線と緯線を格子状に配列し，1枚の地図上に世界全体を描くメルカトル図法が発表されたのは1569年のことである。もちろん，③地球上のあらゆる地域の存在があまねく知られるようになるまでには，さらに多くの時間が必要であった。

ところでコロンブスやヴァスコ=ダ=ガマの事業は，名目上はスペインおよびポルト

ガル両国の王室事業であった。しかしそれらの事業は，実際にはイタリアのジェノヴァの資本・技術・人に負うことが多かったようである。この意味で，いわゆる新大陸関連の事業は民間主導のもとに進められたといえるかもしれない。

世界規模のヒト・モノ・カネの移動に関して，アメリカに進出したスペインの場合に特に重要であったのは，銀山の発見と砂糖の生産である。スペインはポトシ銀山などで採掘した銀をヨーロッパに持ち帰るとともに，銀はアカプルコ貿易などによりアジアにも輸出された。砂糖の原料となるサトウキビはカリブ海東部の（　D　）で栽培された。銀の採掘とサトウキビの栽培には大量の労働力が必要とされる。そのためスペインは，④当初は先住民を酷使し，先住民が伝染病や過酷な労働で死滅した後は，商人や外国政府と奴隷供給契約を結び，アフリカの黒人を奴隷として輸入した。他方，主としてアジアに進出したポルトガルの商人は，胡椒（こしょう）やクローブ（丁子）などの確保に必要な拠点をおさえ，それらの香辛料をヨーロッパ市場に運んで，莫大な利益を得た。

スペインとポルトガルの後は，（　E　）条約以前から海外進出と繁栄に向かっていたが，同条約によってスペインから独立したオランダが黄金時代を迎える。オランダは海運業を発達させるとともに，金融の点でも国際金融の中心となって発展した。

こうして，ヒト・モノ・カネの移動は世界規模で広がりつつあったが，スペイン・ポルトガル・オランダのいずれの国も，世界市場のあり方を変えるまでには至らなかった。世界市場をヨーロッパ中心の体制に組み替えることに成功したのは，イギリスである。

イギリスは当初，インドからキャラコと呼ばれる綿織物を輸入していた。キャラコはヨーロッパの中流・上流階級において大きな人気を博し，イギリス政府は国内の毛織物業や絹織物業を保護するために，キャラコ輸入禁止法を制定するほどであった。しかし，⑤織物機械と紡績機において革新的な発明がなされたことを契機として，イギリスで産業革命がおこる。その結果，アメリカのプランテーションで栽培された綿花を原料とし，高度な織物機械と紡績機を用いて生産された安価で良質の綿織物が，イギリスから世界へ大量に輸出されるようになった。

18 世紀以降，喫茶の習慣が広まったイギリスでは，中国からの茶の輸入が急増し，イギリスから多量の銀が中国に流出する事態となっていた。だが，上記のような綿織

物の大量輸出を背景として，18 世紀末から 19 世紀にかけては，インド産のアヘンを中国へ，中国の茶をイギリスへ，イギリスの綿製品をインドへ送る三角貿易が行われた。

19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて，ヒト・モノ・カネのグローバル化の流れはさらに加速していく。

16 世紀以来，⑥ヨーロッパからアメリカ大陸への人口移動がみられたことは事実である。しかし，19 世紀後半から第一次世界大戦までの時期における人口移動の規模は，それ以前の時期をはるかに上回っていた。また 19 世紀末以降は，それまでのイギリス・ドイツ・スカンディナヴィア諸国に加えて，南欧・東欧諸国からの移民が急激に増加していく。もちろん，ヨーロッパからの移民の中にはオーストラリアなどに向かう者たちもいたが，彼らの大部分は北米および南米大陸を目指したという。

また黒人奴隷貿易は，19 世紀の半ばまでにイギリスなどのヨーロッパ諸国で廃止された。だがそれに代わって，クーリー（苦力）という短期の低賃金労働者が用いられるようになる。クーリーは主として中国から現地に渡り，そこで短期の契約労働者として酷使された。

ヒトの移動は，移民やクーリーという形でのみ促進されたわけではない。トマス＝クックは安価な夜行列車や乗合馬車を利用し，多くの庶民を 1851 年の第 1 回ロンドン万国博覧会に運ぶことに成功した。彼はその後，1855 年のパリ万博や 1869 年におけるアメリカ初の（　F　）の開通，およびスエズ運河開通などの機会をとらえて海外旅行も企画し，庶民の娯楽としての旅行を定着させたといわれている。

世界規模でのヒトの移動に加えて，19 世紀後半以後にはモノの移動も飛躍的に活発になった。実際，当時は世界貿易の規模の急速な拡大がみられた。こうした状況の中で，基本的には工業化をいちはやく達成した先進資本主義諸国が主として工業製品を輸出し，植民地化された地域は一次産品を輸出するという貿易構造が確立されていく。

さらに第一次世界大戦以前は，貿易の自由化だけでなく，金融の面でも以前に比べれば自由化に向けた進展がみられた。この結果，カネ（資本）も国境を越えて比較的自由に移動した。1870 年代以降，「世界の銀行」として国際経済の中心となったイギリスなどの先進諸国から輸出された資本は，外国や自国植民地における鉄道建設など

に用いられた。

このようなヒト・モノ・カネの国境間の大規模な移動を可能にした要因の1つが，鉄道・大型蒸気船・電信といった近代的な輸送手段および通信手段の出現である。イギリスにおいて1830年に本格的に開通した鉄道は，その後急速にヨーロッパ，両アメリカ大陸，アジア，アフリカなどに普及していく。また，世界最初の外輪式蒸気船を建造した技師であるフルトン以来，さまざまな改良が加えられた蒸気船は，やがて帆船に代わって大洋航海の主役となった。これらによってヒトとモノを短期間の間に大量に輸送できるようになったことは，いうまでもない。

また1851年には，最初の海底電信ケーブルが英仏のドーヴァー海峡間に開設されている。海底電信ケーブルはその後，大西洋間，イギリスとインド間にも開通し，世界の一体化が推し進められていく。その結果，例えば，イギリスとアメリカ大陸の間の情報伝達に要する時間は大幅に短縮された。

19世紀半ばに設立されたロイター通信社は海底電信ケーブルを利用して世界中に情報網を整備し，各地に派遣された特派員がロンドンに情報を送り，その情報が新聞社などに発信された。ロイター通信社は，19世紀後半に入って起こったインド初の大反乱である（　G　）をいち早くロンドンに伝えてその価値を示し，やがて世界最大の通信社に成長した。こうして，情報も国境や大陸を超えて急速にやりとりされるようになっていったのである。

しかし，19世紀後半以降に進んだ世界の一体化の流れは，第一次世界大戦の勃発⑦によって停滞を余儀なくされてしまう。とりわけ1929年に発生した世界恐慌⑧後に，イギリスなどの諸国は自由貿易政策から保護貿易政策への転換をはかっていく。その後，世界恐慌から抜け出す方途を模索する過程において，もてる国ともたざる国との間の対立・緊張関係が高まり，結果的に第二次世界大戦を招いた。

こうした基本認識のもとに，第二次世界大戦後は，西側諸国の盟主的存在となったアメリカの主導でグローバル化に向けた歩みが再開されていく。1944年のブレトン＝ウッズ会議の結果，国際通貨基金（ＩＭＦ）および国際復興開発銀行（ＩＢＲＤ）が設立され，金に裏づけられたドルを中心とする国際通貨システムがつくられた。さらに，自由化交渉をつうじて世界貿易の規模を拡大させるために，関税と貿易に関する一般協定（ＧＡＴＴ）も成立する。ただし，第二次世界大戦後においても，先進国が

工業製品を輸出して途上国が一次産品を輸出するという19世紀以来の国際貿易パターンは基本的に維持された。そのため，先進国が豊かになっていく一方で途上国は豊かさを十分に享受できないという（　H　）問題が論じられるようになった。

第二次世界大戦後，西ヨーロッパ諸国は労働力の確保などを目的として移民を受け入れるようになる。その結果，旧植民地などから大量の移民が流入した。1960年代にはカナダとオーストラリアが自国の社会を発展させるために移民を受け入れ，1920年代以降，一時的に移民を制限していたアメリカも再び移民を受け入れるようになった。

ただし，ブレトン=ウッズ体制のもとでは資本移動が制限されていた。そのため，国際的なカネの流れは，融資や無償援助をつうじたものが中心であった。⑨

1970年代に入ると，ドル=ショックおよびオイル=ショックによりブレトン=ウッズ体制は崩れ去り，国際通貨システムは固定相場制から変動相場制に移行した。これにより，各国は自国通貨と外国通貨の為替レート（交換比率）を一定範囲内に維持する義務から解放され，国際間の資本（カネ）の移動が自由になった。そして，オイル=ショック以後に経済的停滞と物価上昇の同時発生を意味するスタグフレーションが世界経済に打撃を与えると，それまでの政策運営の理論的基礎であった政府の市場介入を正当化するケインズ主義も批判にさらされていく。その結果，市場への政府介入の度合いを低め，福祉の縮小・民営化・規制緩和などによって「小さな政府」を目指す新自由主義と呼ばれる考え方が唱えられ，イギリスの（　I　）首相やアメリカのレーガン大統領の政策運営に影響を及ぼすようになった。

ところで，東側諸国の盟主であったソ連では，1985年に（　J　）が共産党書記長に就任し，そのもとで計画経済から市場経済への転換の動きがみられた。その後，1991年のソ連崩壊に伴って東欧の社会主義圏が解体されると⑩，旧東側諸国の大部分が市場経済化の波にさらされていく。こうしてグローバル化は，旧社会主義諸国をも巻き込んで，文字どおり地球規模で展開されるようになった。

さらに，インターネットが1990年代後半以降に普及していく。その結果，ネット環境が整備されているならば，どこでも瞬時に大量の情報が発信されるようになった。また株式などでもネット取引が導入されていく。ＩＴ化は生活の利便性を飛躍的に高めた反面で，政治・経済・社会の動向に大きな影響を及ぼすようになっている。

問１　下線部①に関連して，以下の記述の中で正しいものを，次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア．アッカド人はメソポタミア南部において最古の文明を築いた。

イ．古代エジプト人の宗教は太陽神アポロンを中心とする多神教であった。

ウ．メソポタミアでは十進法や太陰暦が使用された。

エ．中王国時代末期のエジプトにはシリアからヒクソスが侵入し，国内を一時混乱に陥れた。

オ．アムル人はバビロン第１王朝をおこし，サルゴン１世の時に全メソポタミアを支配した。

問２　下線部②に関連して，以下の記述の中で誤っているものを，次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア．チンギス=ハンはイラン方面のホラズムを破り，西夏を滅ぼした。

イ．チンギス=ハンの後に即位したオゴタイは金を滅ぼすとともに，カラコルムに都を建設した。

ウ．チャガタイ=ハン国は後に東西に分裂し，西チャガタイ=ハン国からは後にティムールが台頭した。

エ．キプチャク=ハン国が内紛によって衰えると，ワルシャワ大公国が次第に勢力をのばした。

オ．バトゥは東欧に侵入し，ワールシュタット（リーグニッツ）の戦いでドイツ・ポーランド連合軍を撃破した。

問3　下線部③に関連して，以下の記述の中で誤っているものを，次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア．19世紀の半ばから後半にヘディンとスタンリーがアフリカ内陸部を探検した。

イ．オーストラリアは，オランダの探検家タスマンによって17世紀中ごろにはヨーロッパ人に知られていた。

ウ．1911年にノルウェー人のアムンゼン，1912年にはイギリス人のスコットが南極点に到達した。

エ．1909年にアメリカ人の探検家ピアリが北極点に最初に達した。

オ．イギリス人クックの太平洋探検により，ニューギニア・ニュージーランド・ハワイに関する知識が獲得された。

問4　下線部④に関連して，スペイン国王が植民者に対して征服地の先住民をキリスト教化することを条件に労働力として使役することを認めた，16世紀にスペインがアメリカ大陸で採用した土地制度の名前は何か。

問5　下線部⑤に関連して，次の出来事を歴史の古い順に並べ替えなさい。

ア．クロンプトンによってミュール紡績機が発明される。

イ．アークライトによって水力紡績機が発明される。

ウ．カートライトによって力織機が発明される。

エ．ジョン=ケイによって飛び杼(ひ)が発明される。

オ．ハーグリーヴズによって多軸紡績機が発明される。

問6　下線部⑥に関連して，1620年にメイフラワー号でイギリスからアメリカに渡り，ニューイングランド植民地の基礎をつくった人々のことを何と呼ぶか。

問7　下線部⑦に関連して，第一次世界大戦の直接的な原因となった事件の名前は何か。

問 8　下線部⑧に関連して，アメリカで恐慌が発生した原因について 100 字以内で説明しなさい。

問 9　下線部⑨に関連して，1947 年に当時のアメリカ国務長官から提案された経済援助に基づくヨーロッパ経済復興計画の名前は何か。

問10　下線部⑩に関連して，第二次世界大戦後の東欧社会主義圏に関連する以下の出来事を歴史の古い順に並びかえなさい。

ア．チェコスロヴァキアでプラハの春と呼ばれる民主化・自由化運動がおこる。

イ．ポーランドでワレサを中心に連帯が組織され，政府に改革を求めた。

ウ．ワルシャワ条約機構が結成される。

エ．ルーマニアで独裁体制を敷いていたチャウシェスク夫妻が処刑される。

オ．東ドイツがベルリンの壁を築く。